

「わたしに従いなさい」（ルカによる福音書九章一八〜二七節）

1 ペトロの告白

五つのパンと二匹の魚で五千人を豊かに養った。満腹させただけでなく、残ったパン屑を集めると十二籠にもなった、このイエスのまさに奇跡、先週私ども聞いたところです。

この奇跡がなされたのは、思い起こしていただければと思いますが、ベトサイダという町でした。そこにイエスと弟子たちは、もともと祈りのため、休息をとるため赴かれたのです。しかしそれと知った群衆が押しかけたため、イエスも休んでおられない。福音を説き、いやしを行い、その働きの中で、五千人に食べ物を与えるという奇跡が起こったのです。そのあと、ようやく、今日の箇所のはじめを見ると、イエスは、祈りと休息の時を得たようです。

イエスがひとりて祈っておられたとき、弟子たちは共にいた（一八節）。

このときイエスは弟子たちに、あなたがたはわたしを何者だと思っているのか、何者だと言うのかと、改めて問うたのです。そのやりとりの最後の部分、イエスとペトロの言葉を、さし当たり取り上げます。

イエスは言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」。ペトロが答えた。「神からのメシアです」（二〇節）。

なぜこうした問答がここで行われたのでしょうか、それはルカが、この九章のはじめから書いていることと関係があります。その一〜六節によれば、イエスは、弟子たちを、十二人を、使徒として宣教に遣わされます。ご自身のもっている神の子の「力と権能」を与えて、神の国の宣教に送り出しました。

実際十二人はそれをよく果たします。こうしたことは、これを始まりとして、これからもなされることです。むしろ神の国の宣教は、イエスを引き継いで、彼らによって担われていかなければならないのです。この十二人は、しかし本当に、それを担っていくことのできる、本当にイエスがそれを委ねることのできる、信頼できる集団なのでしょうか。それが問題です。

しかし「委ねることのできる、信頼できる」とは、どういうことでしょうか。それだけの人間的な能力があるかないか、そういうことが問題でないことはいうまでもありません。

それなら何が問題なのでしょう。何が問われるべきでしょうか。それは、イエスをどうとらえているか、何者だと考えているか、ということですが、そしてそれをはっきりイエスに対して言い表すことが問題なのです。その正しい理解、その正しい言い表し、すなわち、告白がなければ、委ねることはできないのです。

あなたは「神からのメシア」。それにしてもペトロは、このとき見事な答えをしま

した。その背景に、この直前の出来事、イエスによる五千人の給食の経験があったことは言うまでもないことです。あのとき、弟子たちは、まったく何もできませんでした。人間的な力に頼り不信仰をさらけ出しました。これに対してイエスは、ただ神のみに依り頼み、天からのまさに豊かな養いを受けたのです。それまでも弟子たちはイエスが特別の人だということは、よく分かっていたのです。しかし、それは、たんなる超能力、異能の人間などではなくて、イエスが神から遣わされたメシア、キリスト、であることをそのとき確信したのです。そうして確信に、そのとき、神によって導かれたのです。

神からのメシア、神からの救い主、キリスト、この確かな信仰とその言い表し（告白）、それをもって使徒たち、十二人は、イエスと歩みを共にします。何よりも、イエスが弟子たちに、その言い表しを求めたということが、重要です。それは、言い表しても言い表さなくてもよいというようなものではありません。その言い表し、告白をもって歩め、ということです。主イエスは、そのような告白の上に教会を建てると約束しています（マタイ一六・一八）。

2 苦しみを受けて、栄光に入る

まことにペトロは、見事な答え、見事な信仰の告白をいたしました。イエスの問いかけは、「あなたがたは・・・何者だと言うのか」というものでした。ペトロがそれに答えたわけですが、それは十二人を代表したものでした。みんなの信仰が、一つの言葉として表されたのです。この告白を受けて、イエスは再び、弟子たちみんなにこう告げます。

イエスは弟子たちを戒め、このことをだれにも話さないように命じて、次のように言われた。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥され殺され、三日目に復活することになっている」（二一～二二節）。

なるほど見事な信仰の言い表しでしたが、イエスは、それを、だれにも話さないように命じています。どうしてでしょうか。

この福音書の四章で、だれにも話すなという、同じ言葉による命令が悪霊に対してなされていたことを思い出します。悪霊が、イエスに向かって「お前は神の子だ」と言いながら病人から出て行った。その悪霊に対して、イエスは、それ以上もの言うことをお許しにならなかった。それは悪霊がイエスはメシアだと知っていたからだとあります（四一節）。

ペトロがここで悪霊に見立てられているわけではありませんが、しかし悪霊に見立てられるほどの誤解が、ペトロの、それ自身としては正しい告白の中に、含まれている可能性はあったのです。

その間の事情を明らかにしているのはマルコによる福音書です（八・三一～）。それによると、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥され殺され、三日目に復活することになっているとイエスが教え始められると、ペトロはイエスをわきにお連れし、いさめ始めたというのです。先生、そんなことおっ

しゃってはいけません、どうして、メシア、キリストは、苦しめられて殺されたりするでしょうか、また復活とは何でしょうかというわけです。そしてその時、イエスはペトロを叱って、ペトロだけではなく、弟子たちみんなに向かって、「サタン、引き下がれ」と言ったというのです。

ところで「人の子」というのはメシアのことを指します。人間の子どもという意味もありますが、旧約聖書以来、多くはメシアを表します。ですからイエスは「人の子は・・・」と言って、じつは自分のことを言っているのです。わたしは苦しめられ排斥され、ついには殺されると。

ここに示されているのは、メシア、キリストの辿る道です。私どもが何より注意して受けとめなければならぬのは、いまお読みした三節の中にある「必ず・・ことになっっている」という言葉です。必ず、そうならなければならない。この「必ず」の根拠は神にあります。神の必然、神の御心によって、メシアは多くの苦しみを受け、ユダヤの指導者たちに受け入れられず、むしろ捨てられ、殺される。しかし三日後に甦る。この甦るも、詳しく言えば、神によって甦らされるということです。一貫して神の御心によります。

ご承知のように、メシアとは、油注がれた者の意味で、イスラエルでは、ダビデの子孫に約束された、公平と正義を実現し、イスラエルに救いをもたらす王として到来する方です。それは、この時代、ローマの支配下にあつて、ますます強く待望されるものとなっていたのです。それと共に、しかし聖書では、とくに預言者において、メシアは「苦しみを受けて、栄光に入る」（ルカ二四・二六）という理解も、行われていたのです。エマオ途上で、イエスご自身が二人の弟子に、それを思い起こすように語っています。

いずれにしても、あなたはメシア、というペトロの認識、告白は正しいのです。しかしイエスご自身によつて、そのメシアは、どのような道を辿り、神の救いを実現するのか、ペトロをはじめとして、弟子たち、使徒たちは、教えられなければなりませんでした。

むろんまだその時は来ていません。使徒たちは、イエスと共に、なおも神の国の宣教にとめなければなりません。それゆえ、イエスをメシアだと早まって言い広めて、救いの道が阻まれてはならないのです。

3 われに従え

こうして弟子たち、使徒たち、十二人の神の国の宣教がいよいよ重要性を帯びてきたことは明らかです。彼らは、イエスと共に、どのように、その与えられた使命を果たして行くべきなのでしょうか。

それから、イエスは皆に言われた。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。（二三節）。

「イエスは皆に言われた」。この「皆に」がここで強調されています。いまここにいる弟子たち、一二人の使徒たちだけではない、イエスを信じるすべての人、いま聖

書読む子どもも含まれています。命じられているのは、要するに「わたしに従いなさい」ということです。

イエスに従うことを考えるとき、つい見逃しがちになりますが、ルカ八章のはじめに書いてある何人かの婦人たちのことが参考になります。

悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラのマリア、ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた（八・二～三）。

ここに名前の上がっている女性たち（あのヘロデの家令の妻もいます）、上がっていない女性たち、彼女らはしかし、みな何らかの形で、神の憐れみ、恵みを与えられた人たちです。

彼女たちは、一人一人、事情は違っても、自分たちの受けた憐れみ、恵みを深く受けとめたのです。まさにそれを、自分にとって何にも代えがたい高価な恵みとして受けとめたのです。それゆえ、「自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕」することは感謝の現れであったと言ってよいと思います。イエスに「従う」ことは、そこから起こるものです。

私どもの信仰が、従うことに向かつて行くとき、そこにあるのは、恵みが深く受けとめられていることです。そのとき、イエスの言葉、教え、そしてイエスの働きは私どもにとって、私どもの踏み行うべき道として、明らかになります。「キリスト・イエスに倣う」（ローマ一五・五）、それがイエスに従うということです。その意味で私どもは聖書の示すイエスを、その言葉を、よく知らなければなりません。それなしに従うことはできないからです。

「われに従え!」、それが私どもに対する今日の聖書のメッセージです。ただ今日の箇所で、一つとても気になるのは、「わたしについて来たい者は」というところ、ちゃんと訳せば、「もしわたしについて来たいと望むならば」です。はっきりした条件文になっているのです。

「もしついて来たいなら」。相当突き放された感じを受けます。しかしそれが、じつは本当のところなのかも知れません。信じて、従って行く、信仰から服従へと自動的につづいていくものではない、つねに試練に満ちたことだということです。

種まきの譬え、私どもは、すでに何回も聞いています。百倍の実を結ぶまでに、どんなにか大変なところを通して行かなければならないかということです。ここでもそうです。イエスは、「自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言っています。自分を捨てというのは、神の国の現実を離れて、この世の現実へと向かう自分の在り方を、絶えず否定しながらということ。自分の十字架を背負ってというのは、自分に課せられた課題と日々向き合いながらということでしょう。そのとき、十字架を背負って、メシアとしての自らの使命に生きた、生き抜いたイエスが私どもの倣うべき模範となります。イエスをメシアとして、キリストとして信じ、それに従って行く者でありたいと思います